

捧ぐ

星の終わりに

【ほしのおわりにささぐうた】

R18  
ADULT ONLY

「私のために誰も祈らない  
これは報いで、罰なんだ」

アリウスとの一件後、ティーパーティーの席を剥奪されて一般生徒として復学したミカ。支えてくれる女先生のためにやり直しを決意するが、引越した寮で待ち受けていたのは陰湿ないじめの数々だった。  
ミカ虐／下痢／トイレ我慢／下剤／浣腸

Novels: あめもちうず  
Cover Illustration: ちょいもず  
Illustrations: はやん、のめ

【ほしのおわりにささぐうた】

制作サークル  
CR あめもちうず

星の終わりに 捧ぐ 歌

Kyrie for the  
Twilight of Star.



星の終わりに捧ぐ歌

あめもちうす

星の光が消えようとしている。

夜空で誰よりも眩しく、瞬き、輝いていた光芒はもう何処にもない。

だけど、あなたの物語はまだ終わっていません！

1

「……与えられた機会に感謝し、決定に従います」

三度にわたって行われた聴聞会により、ティーパーティー・パテル分派の代表であった聖園ミカは全ての特権を剥奪された。

個人で使っていた邸宅からは追い出され、授業も一人だけで受けられていたのも一般生徒と一緒にになり、個人的な予算や権利諸々……自由と許しを引き換えに失ったものは、あまりにも多かった。

聖園ミカ、気まぐれに夜天を泳いでいた一等星。彼女は自らの過ちによって有象無象の星に紛れることになる——権威の失墜、生徒たちからの糾弾、一変する世界。もうかつての輝きも憧憬も得ることは叶わず、残ったのは畏怖と憐憫。

それでも、彼女の瞳は光を失っていなかった。

「先生、来ちゃった☆」

「いらっしやい。突然だね」

日暮れ前のオフィス、先生と呼ばれた大人の女性はパソコンに向き合ったままミカを迎えた。

ヒールの足音を弾ませやってくる訪問者に対して顔を向けることもなく、視線をパソコンのモニタに注いでいる。

「先生、お仕事中心？ もしかして……迷惑だった？」

「ううん、そんなことないよ」

ミカが横に立って初めて、先生はようやく顔をミカの方に向けた。にこりと笑いかけてはいるが疲労の色が滲んでおり、敏い者ならば表情も言葉も空元気であると察してしまうだろう。

何よりも色濃く態度に出ているのは遠慮、それと後ろめたさ。

「お疲れだね、先生」

「まあ、色々だね」

(来るタイミング間違えたかな……)

触れ合える距離なのに、心が遠い。

(でも少しくらい、いいよね)

凡庸であればどうの昔に折れていただろう境遇でも——そもそも非凡ならざる才に恵まれてしまったからこそ不遇な運命を迎えたのだが——ミカは明るく、今を生きている。

親友に手をかけ、トリニティを陥れ、ひたすらに落ちて。誰にも祈られないまま終わるはずの彼女を救ったのはキヴォトスで唯一の大人である先生。

ドライヤーにかけるのが面倒という理由で、肩にかからない長さにしているミディアムストレートの茶髪。柔和さと、時には鋭く意志を秘める双眸。ふてくされて突き出されたり、勝ち誇って伸びたりと、言葉よりも素直に先生の気持ちを代弁する唇。今日も鮮やかなリップの紅色で飾られており、大人びた生徒を魅了している。

生徒想いが過ぎるあまり自己犠牲も厭わないとところが危ういが、だからこそ生徒たちに慕われ、心配され、力になりたいと思わせる。

ミカが女性としても、人としても信頼して心を寄せている先生の存在が彼女に希望を与えていた。

「何してるの？」

「楽しくない書類仕事かな」

「じゃあ私と一緒にお茶しない？ 私と楽しいことしようよ」

「いいよ。でも仕事が終わるまで、待つてね」

キーボードから離れた指先が私の頭を目にかけて伸びて、引っ込んだ。撫でてくれても、いいのに）

むくれるミカに目もくれず、先生は液晶上の白紙に文字を打ち込んでいく。

今日は当番の生徒がいなく、シャレのオフィスは先生とミカの二人きり。だというのに先生は仕事にお熱でちよつぱり残念に感じるミカだが、邪険にされないだけ心地よかった。

先生だけは、ミカを対等に見てくれる。

意図的な隔たりが確固として存在していたとしても、それでも。

（先生の仕事が終わるまで、待つてよーつと）

もちろんミカは遊びに来ただけなので、何かを手伝うことはない。

『構ってほしがりの妹のこと思出しちゃって、ついつい頭を撫でてなだめようとしちゃうんだけど……今どきこういうのもセクハラなんだよね』

ソファに身体を預けて好きな人の背中を眺めながら、先生が知らない誰かに言っていた言葉を思い出す。

（先生、もう撫でてくれなくなっちゃった）

大人の先生の、大きな手。あたたかさに満ちて柔らかくて、優しい手のひらがミカは大好きだった。

（あたたかいだけなら誰でもいい。柔らかいだけなら獣人でもいい。でも優しい手は先生の手のひらだけ）

パテル派の代表／ティーパーティーの二柱／トリニティを陥れた魔女としてのミカを美化せず、そして差別することなく平等に先生は見られる。

それはつまり、特別視もしないということ。

先生の手は誰にでも差し伸べられる。ミカも例外ではないが、それ以上もない。本来ならば軟禁され続けるか矯正局に送られるほどの裏切りを成したミカが、一般生徒として学園生活を送れているのは他ならない先生の助力の賜だ。もちろん現ティーパーティーのナギサやセイアの口添えと献身もあつてこそだが、身内の根回しのみでは到底ミカの罪は許されなかつたらう。

「……今日は、誰もいないんだ」

「たまには生徒の手を借りないでやらないとね」

「私を手伝ってあげよつか」

「気を遣ってくれるなんてどうしたの？ でも今日はやつぱりノー手助けデーだから、見ててね」

（生徒の困りごとにはすぐ首を突っ込んでくるのに、自分は頼ってくれないんだよね。……そういうところが、好きなんだけど）

ミカは遊びに来ただけであつて、仕事を手伝おうなんて気は微塵もなかつたが……お姫様の気まぐれは気まぐれのまま終わったようだ。

「お待ちせ」

持ち込んだ雑誌を読みふけている内に先生は業務を一旦終わらせ、ようやくパソコンから離れて立ち上がる。

「はあー、疲れたっ」

「先生、お仕事終わった？」

「うん」嘘だ。

「じゃあお茶しよ！」

「いいけど、少しだけだよ。そろそろ帰らないと夕食の時間でしょ」  
「わかってるって」

先生が給湯室に向かってしばらく、風情のないお盆に二人分のティーカップを乗せて戻ってきた。

「はい、お姫様。シャーレ特製の紅茶ですよ」

「あ、出た出た。冷蔵庫に常備してあるペットボトル紅茶」

一分ちよつとで紅茶が準備できるわけがなく、ティーカップに注がれているのは特売で買っ溜めた無糖の紅茶だった。言うまでもないが冷蔵されていたので湯気立っているわけでもない。

「あ、不満じゃないよ？ 先生らしくって好き。それに、先生となら何を食べたって飲んだっておいしいし」

コンビニ弁当にカップラーメンばかりの食生活で、世話焼きの生徒たちが放っておけなくなっている先生が本格的な紅茶を淹れられるわけもなく。生徒との休憩といえば種類豊富に揃えたペットボトルのジュースやお湯に溶かすだけのお茶やコーヒーばかりになっていた。

「ご飯の前だけお菓子欲しいよね。あ、柿の種しかない」

「あはは、いいね！ ナギサちゃんが見たら卒倒しそうなティータイ

ムだ」

申し訳なきの欠片もない大人と、上品さを忘れつつある少女。大人の女性として身だしなみは万全に、化粧は入念に、振る舞いもなんかいい感じに優雅に——できていたのも赴任当初の一週間だけ。クリーニングに出し損ねたスーツで仕事をするし、外出の用事がなければすっぴんで、今やだらしないダメ大人としての地位を確固たるものしていた。

先生がテーブルを挟んで二人掛けソファに座ってしまったので、ミカも移動して先生の隣へ。

（先生だけは私のこと邪険にしないで扱ってくれる。やっぱり、居心地いいな……）

「最近よくシャーレに遊びに来てくれるよね。ちゃんとボランティアやってる？」

「やってるよ？ 今日だって古書館の整理手伝ってきたもん」

（貴重な本を触らせてもらえるわけなくて、掃除はつきりさせられたけどね）

「そうなんだ。先生は片付けられないし、積み上げることしかできないからなあ……ミカはすごいね」

「すごい？ えらい!?」

「えらいえらい」

先生がミカを褒めている。だけど手のひらが伸びてくる気配はなかった。

少しでも長く先生と過ごそうとちびちび飲んでいた既製品の紅茶も飲み干し、雑なティータイムは終わってしまった。

「そろそろ帰らないと夕食に間に合わないから、帰るね」

個人邸宅に住んでいた頃は世話係がいたので食事時間は自由で内容も豪華、生活費も潤沢にあったので外食も気兼ねなくできる……文字通りのお嬢様生活だったのも昔の話。一般生徒になった今は寮で共同生活の上、洗濯や食事も時間が決まっているため好き勝手に行動することは叶わなくなっていた。

「また、遊びに来てもいい？」

「もちろん。寂しくなったらいつでも来てね」

「寂しくなんかないよーだ」

（やっぱ先生は鋭いね）

出歩けば魔女扱いで後ろ指を刺され、転居した寮でも浮いてしまっているミカ。先生もミカの心細さを察しているのだろうか。

（それなら、もっと褒めてくれてもいいのにな。つとそうだ、今日はただ遊びに来たんじゃなかった！）

「先生あのね、お願いがあるんだけど」

「ん？ 何かな」

「明日土曜日で先生もお休みだよね」

「うん」

「その、先生が暇で予定がなかったらで、いいんだけど」

さっきまで強気だったミカがしおらしく指を絡め合わせ、肩の触れ合う距離にいる先生に上目遣い。目が合うだけでミカの頬が熱を灯した。

「お買い物に付き合ってくれたら、嬉しいなって」

「んー、買い物かあ」

いじらしいお願いをしたミカに対して、先生は見るからに乗り気ではなかった。

「そうだよね……。せっかくのお休みだし、他の子のお誘いとかもあるんだよ」

「うんイヤじゃないよ。特に予定はないし。でもどうしようかな」  
ダメ大人の先生は外出をしたがらない。最低限の飲食はシャーレのビル一階にあるコンビニで事足りるし、急ぎのものでなければ通販で済ませてしまう。

「そっか……。裁縫の授業があるから道具を選ぶの手伝ってもらおう  
と思っただけ、残念」

「道具？ 裁縫箱のことかな」

「うん。だっけほら、私物はほとんど捨てられちゃったから」

「……：しやうがないなあ。付き合っただけ」

「ほんと!? ありがとう、先生っ！」

（ちよつとズルいけど、やった、先生とお買い物だ！）

（ミカに甘すぎるかな……。でも、困ってるし）

以前も教科書や体操服などを新しく買い揃える際に先生が付き合ってくれたことを思い出し、先生が断りづらい文句で約束を取り付けるのだった。

「無駄遣いできるお金はないだろうから、必要なものを買うだけだからね」

「はーい☆ でも少しくらいはいいよね」

裁縫道具がなくて新たに買う必要があったのは事実として、先生の同伴がなければ買えない物ではない。ミカも裁縫箱を新調するのは休

日のショッピングのついでのもりだったし、先生も食べ歩きやアクセサリー集めに付き合わせられることは何となく予想していた。

先生は先生だから、やっぱり生徒のことを放っておけないのだった。「じゃあ明日、トリニティのショッピングモールに来てね？　時間はまた後でモモトークで連絡するね！」

ソファから立ち上がって上機嫌に羽を広げて駆けていく。

「気をつけて帰ってね」

「はい！　じゃあ先生、また明日ね！」

床の上を踊るヒールの足音、翻るスカートの裾、そしてドアを閉める音まで弾ませてミカは颯のように去っていった。

「さて、と」

（休憩もしたし、残りの仕事済ませなきゃ。もう二〇分で終わるかな）

二人分のティーカップを給湯室のシンクまでは持っていくが洗わずそのままに、お菓子の袋は捨てて再びパソコンに向き合う。きりのいいところで中断した仕事を終わらせようとキーボードに手を添えたが、指先は動かない。

（謹慎明けだけ元気みたいでよかった）

一般生徒に落ちてからしばらく、先生がミカのために買ってあげた新しい水着が破り捨てられるという事件があった。ミカは怒りを自制して手を出さなかったが、慌てて転んだ生徒が怪我をして大事になったのだった。

水着は修繕できたが、ミカの受けた傷は／犯した罪は消えない。ミカの凋落を面白がってちよっかいをかける生徒や、恨みが募って陰湿ないじめをする子がまた出て来ないとも限らない。ミカが二度と同じ

過ちを繰り返さない決意を秘めているようにと、処罰を受け入れて反省の態度を表し続けても、全てが正しく伝わるわけではない。万人が理解を示してくれるわけがない。

（そういうところは、外の世界と同じなんだな）

理不尽な社会から逃避して、いつの間にかキヴォトスに赴任した先生。頑張りが報われない、失敗から立ち直れない、現状を打破するにはどうすればいいかわからない——困難に立ち向かう生徒のために全力を尽くすのが大人で、先生だ。

（自身を省みて新しい生活を送ろうと努力するミカを応援してあげたい。買物の付き添いくらい、ボランティアの手伝いくらい、ミカがリラックスできるなら遊びに来てくれるのを歓迎してあげたい。だけど……）

自身の手で、足で、想いで進み出した生徒に過剰な手ほどきをしてあげるべきではないとも、先生は考えていた。

女傑アトリーチェに身も心も囚われていたアリウススクワッドの面々は、解放されてから各地を転々として自分探しの最中だ。もちろん住居や教育の環境を提供する用意もあったが、本人たちがそうすると願ったのだから、先生は余計な世話を焼かなかった。もちろん彼女らが連絡を寄越してくれば先生は駆けつけて助言や手助けをしている。

（ミカ……。私はどうしてあげればいいのか。ミカが嫌な思いをしないようにしてあげられることはたくさんある。でも私に頼りつきりで、私がいなくなるときは）

ミカが先生に抱いている好意よりも上位の本意を、今は見ないフリ

をする。

(あ、仕事しなきゃ)

オフィスの電気が落ちたのは、ミカがいなくなつて一時間後だった。

\*

一日の大半を過ごす学生寮に息苦しさを感じるのは、仕方のないことだと思ふ。

トリニティ自治区の一角に座する煉瓦造りの古びた建物が、私が引越した先の学生寮だ。外観が煉瓦の壁だから文化的とか、おしゃれに思う人がどこかにいるのかもしれないけれど……少なくとも私は、そう思えなかった。その理由を言語化することができないし、そもそも建物自体が古くて嫌悪感が強いから良い印象が持てないだけなのかもしれないし。

まだ門限ではないけれど、夕食が提供される時間は決まっている。特権で潤沢なお小遣いがあった頃と違って外食は贅沢、ご飯に間に合わない朝までお腹を空かせて過ごさないといけない。

料理なんてしたことないから作らなくてもご飯が食べられるのは嬉しいけれど、時間を守らないと食べることはできない。世話係がいて、好きな時間に好きなものを作ってくれるときは違うのだから、これも仕方ない。

お風呂も洗濯も消灯時間まで決まっています、自由なんかない大きな監獄じゃないかと思う。でもホンモノの牢屋で何もかも見られながらルーラーキーばかり食べさせられるよりマシか。

煉瓦で組まれているのは外壁だけで、中は木造。軋み剥がればかりで傷んでいて、生活音は筒抜け。ポロ宿じゃん。そのせいか寄宿している生徒も少なくて空き部屋が多いんだけど、なんでこんなハズレっぽいところに越させられたんだろ。

文句を言える立場じゃないんだけどね。

自室に戻らず一階共用スペースの食堂へ。夕食時間が始まっていたのでテーブルを囲んで数十人くらいが食事を進めていた。

この寮は朝と夕の二食が提供され、休日は事前に申告しないと食事が出ないので注意。主菜と副菜が小皿に盛られて並んでいて、一人一皿取つてご飯と汁物は自分でよそう。それくらいならできるよ。

お盆に自分の分を準備して、食堂の一番奥にある四人がけのテーブルへ。いつの間にか私の定位置になつちゃった、誰の邪魔にもならない場所。

入居者の少ない、古くて変わった寮でも私という異物は浮いてしまう。賑やかで照明も効いている真ん中のテーブルなんて座つたら睨まれる。事実、私よりも先に住んでいる生徒たちで定位置が決まっているらしくって、知らずに手近なところに座つたら響盛を買つちゃった。だから私は電灯が切れたまま薄暗い、端っこで食べるのがお似合い。「いただきます」

ここは誰も使わないみたいだから、席がなくて立つたまま食べるなんてことは二度とない。

できるだけ顔を上げないようにして、黙々と食べる。調理された食べ物をお口に運んで、咀嚼して、嚥下して、消化して栄養を摂取して空腹を満たす行為。ずつと良いものばっかり食べて舌が肥えているって



いうのかな、美味しくも不味くもない最低限の料理を体内に押し込むだけ。質の悪い食材を濃い味付けでごまかしているだけ。

……先生となら、どんな食事でも楽しめるのにな。ペットボトルの紅茶でも廉価なお菓子でも、すっごくおいしかったもん。

「ごちそうさま」

食べないと生きていけない。僅かな寮費で二食提供してくれるんだもん、感謝しないとね？

「ミカ様、ごきげんよう」

俯いていた私に陰が落ちた。顔を上げると一人の生徒がいつの間にか立っていた。

「あ……ごきげんよう」

名前は知らない。でも知らない子じゃない。

この寮において唯一、私を歓迎してくれてお話をしてくれる子。ルールにない暗黙の了解を明文化して教えてくれた子だ。

「お食事は終わりました？」

「うん」

「もしミカ様がよろしければなんですが、今からお茶でもいかがですか？」

「うん！」

前髪は伸ばしっぱなしで目がはっきり見え、その毛先もぼさぼさ。痩せ気味で身長が低く見えるけれど、これでも高校三年生みたい。

暗い見た目をしてるけど、こんな私でも差別しないで好意的に付き合ってくれる、とってもいい子。

私が食器を下げている間にあの子がティーカップやポットを準備してくれて、薄暗い隅っこのテーブルは小さなお茶会の会場になった。学生寮にお茶を楽しむためのカトラリーが充実しているのはトリニティ特有の文化らしくって、ポロの寮でもそれは同じ。食器は量産品だしお茶つ葉や自前だけね。

あの子が丁寧に淹れてくれているのを対面でじつと眺める。

本格的に紅茶を淹れようとするお湯の温度だとか葉っぱのコンディションとか、数分蒸らしてカップも温めてとか……ほんと細かいことばかり要求されてめんどくさい！ って愚痴るとナギサちゃんキレルから禁句。私もトリニティ生の嗜みとして最低限はできるけれど、やっぱり人に淹れてもらうのが一番！

この香りはアールグレイかな。

「あったかい……。あなたの淹れるお茶は美味しいね」

「ありがとうございます。これくらいしか得意なことがないので」

味方がいないと思っていたこの寮において、この子だけが私の癒やしで、頼りだった。

「お菓子が用意できなかったのが心残りです」

「んーん、そんなのいいよ☆ たまには私が用意しないとね」

「今日のミカ様は機嫌がよさそうですね。何かいいことがありましたか？ ぜひ聞かせてください」

「そうなの！ 聞いて聞いてー！」

この子は私のことをよく見ているね？ 息苦しさであふれている寮にいてもなお隠しきれないハッピーが見抜かれちゃったみたい！ シャーレに遊びに行ったこと、一緒にお茶できたこと、それとお買

い物に行く約束を取り付けたことを話した。

あんまり人に言わない方がいいかなと思っただけれど、この子ならいいよね。私によくしてくれるし……。

「あのシャーレの先生とお買い物なんて、それはさぞ楽しいことでしょうね」

「でしよでしょ！ あ、でも他の人には内緒だよ。その……先生にあまり、迷惑かけられないから」

「わかってますよ」

あの子の口元が柔和に反った。

「お話してくださいさるなんて、私のことを信用してくれるんですね」

「もちろん。だって——ううん、なんでもない」

誰にでも心を寄せていいとは思えない。

だって私こそ『私を信じないで』って誰かに、仲間だった人に、そして先生に願うんだから、押し付けるんだから、言ってしまうんだから。

——私を信じていたら痛い目を見るよ。

そんな悲しいこと言いたくないよ、思われたくないよ。だけど私が私こそを信じられない。短慮で人の気持ちを考えられないわらい子に無用な信用を寄せて、裏切られたらどうするの？

だから今度こそ頑張らなきゃ。

「ミカ様をご機嫌だと私も嬉しいです。せっかくですから、もう一杯いかがですか？」

「うん、じゃあ貰おうかな」

「二杯目は風味を変えてミルクティーにしましょうか」

「うーん、ミルクティーの気分じゃないかも」

「私のおすすめのミルクがあるんですよ。きっとミカ様も気に入りますから。持つてきますね」

「そこまで言うなら試してみようかな」

あの子が共用の冷蔵庫へミルクを取りに行つたのを見送りながら、周りを見渡してみる。私が他の子と仲良くお茶してるけどジロジロ見られたり、露骨に陰口を叩かれたりしている様子はない。

引越してからというもの、洗濯物に泥を入れられたり、夜中にドアを乱打されたり、聞こえるように悪口を言われたり……：私がティーパーティーの一員じゃなくなったのをいいことにひどいことをされ続けてきたけれど、最近は何もされなくなっちゃった。どんなことをされても耐えて無視する努力をするつもりだったけれど、杞憂だったのかな。

先生に買ってもらつた水着をポロポロにされて仕返しをした——実際は何もしてないけど、いじめには屈しないという態度を示せたから、誰も手を出せなくなつたのかも？

大丈夫、これからいい子になればみんな認めてくれる。

誰かを傷つけたことはもう治せないけれど、頑張ればきっと取り戻せるはずだから。

「お待たせしました」

「ううん、ありがとう」

楽しく談笑しながらミルクティーを淹れてくれるのを眺め、できたてを飲んでみる。

「あ、おいしい。アールグレイにミルク入れると紅茶の味がぼやけ

ちやうかなと思っただけど、香りもいいし茶葉の風味も強く感じるね」  
「そうなんです。ミルクと相性がいいアールグレイを選んだので、ミカ様に気に入ってもらえて嬉しいです。

私も好きなんですよ、このミルク」

息苦しさを跳ね除けるために強く保ち続けていた精神力がほぐれていく。お腹だけじゃなくて、心もあつたまる……。

「ごちそうさま。とつてもリラックスできたよ！」

「よかったです。ミカ様にとつて明日がいい日になりますように。」

デートの成果、聞かせてくださいね」

「デートだなんてもう！ ……うん、ありがとう」

あの子と別れて入浴を済ませ、明日立ち寄るショッピングモールのことを調べて早めに就寝した。

最近はまだ眠れないことがあったけれど、今日はすんなりと眠りに落ちることができた。

2

うーん、いい朝っ。

久しぶりに快眠できたおかげで、朝の目覚めが気持ちいい。

騒音、嫌がらせ、悪夢、消化しきれなかったその日の不安。不眠の原因が何もなくよかつた。

あゝあ、個人邸宅のときはいつでも寝られて好きな時間に起きられて、それでも朝ご飯と食後のティータイムは黙つても提供されてたんだから贅沢な暮らしだったよね。土曜日くらいたっぷり寝たいけど、朝ご飯の時間は決まつてるし早めに起きないとなんだよね。私の部屋は三階建ての寮の更の上、元は物置だった屋根裏部屋。入居者が少なくして部屋が空いている寮んだけど、私は特別みたいだから日当たりもよくてどの個室よりも広い場所なんだよね。

ということにしてる。

食堂やお風呂、洗濯室などの共用スペースは全部一階だから一番遠いし、部屋に上がるための階段も急で狭いから荷物を上げたり降ろしたりするのも一苦労。でもトイレや洗面台は各階にあるだけマシかな。今は午前八時前。もう少しベッドでごろごろしていたけれど、あと三〇分で朝食の提供が終わるから早く起きなくちゃ。できるだけ寮食は減らしたくないから土日でもできるだけ食べられるように申請してるし、無駄にしないためにも起きないとね。

寝起きだから踏み外さないよう慎重に階段を降りて、三階のトイレで朝のおしっこを済ませてから洗顔。生徒の少ない食堂で朝食を済ま

せる。朝はライスかパンか選べるんだけど、今日はパンがいいかな。安いパンだからなのかちよつと堅くてぼそぼそしてるけど、ジャムやバターは充実してるから食べられないこともないし。

さて、先生と会うのは一二時からだから、まだ三時間くらいあるかな。ショッピングモールまで三〇分くらいかかるから早めに出るとして、自由時間は二時間か。ま、身だしなみを整えて準備してたらあつという間だよ。

ということでも念入りに歯磨きを済ませてから、部屋で数少ない私服を並べて今日のコーディネートに頭を悩ませているときだった。

ぐるぐるぐる……ごろごろごろ

「ん……っ」

急に便意が……。ウンチ、したい。

三日ぶりにウンチがしたくなってきたみたい。それも、ちよつとお腹が痛くてごろごろしてる。

あ、オナラ出そう。

誰もいない部屋だしいつか、しちゃえ。

「んっ！」

ブーッ！ プビプビプビピーッ！

「はああ……」

ちよつとすつきりしたけど、くっさい……。便秘気味でヤなおいのオナラだ。

ごろごろごろ……

オナラもしたせいで、もつとウンチしたくなってきちゃった。

朝ご飯を食べてお腹が活発になったのかなと思っただけれど、食後か

ら一時間くらい経つてしたまたまかな。檻に囚われてからずつとお通じが悪くなって便秘気味なんだよね。邸宅にいたときは食後にしたくなるが多かったけど、生活環境が変わってからは数日催さないことが当たり前になったし、催すタイミングもバラバラだし。

身体も動かせない檻の中でロールケーキばかり食べてたらウンチが出なくなるのも当然だし、そもそも監視下で落ち着いてウンチでできないからできるだけ我慢しちゃうし……。寮に越してからもストレスで便秘のまま。

お出かけ前にウンチしなくなったのは良いことだよ？ これから先生とデートなんでもん、一緒にランチもする約束だし食後に大きい方したくなるなんてサイアクだもん！ 出発前に少し籠もって踏ん張っておこうかなって思うのも乙女心。余裕のあるときにしたくなるなら好都合だけど普通の便意じゃないっばい。

ごろごろ鳴ってるし、少しお腹が痛いから調子、悪いのかな。

先生と会う前にウンチ出るのはいいけど、具合が良くなるなくて買いた物にまたウンチがしたくなったらヤだな……。せつかくの楽しい時間にお腹痛くなつて、ウンチが我慢できなくてトイレに駆け込むなんて考えたくもないし、一緒だったら音やにおいでウンチってバレて幻滅されちゃう！

だから、時間のある内に済ませなくちゃ。

「今のうちにトイレ行こつと」

服をあれこれ選んで下着姿のままだったから部屋着に着替え、階段を降りて三階へ。

ごろごろ ぎゅるる

うーん、お腹がゆるくてちよつとしんどい。トイレに行くって決めた本格的に便意が強くなってきちゃった。三日くらいウンチ出てない上にごろごろしてるから、いっぱい出ちゃうかな。

屋根裏への階段から三階トイレまでは遠くて、廊下の端まで行かないといけないのが辛い。でもお腹壊してるわけじゃないし催してすぐ降りてきたから大丈夫。お腹痛くてトイレに急いでるなんて姿を見られたら嫌なことわれちゃう。慌てず澄まし顔でトイレに向かった。

「あれ、誰か使ってる」

寮のトイレは横に広くて個室が四つ並んでる。入るとどの個室が空いてるか見てわかるんだけど、並んだ二つが使用中。休日の十時くらいって外出してる子も多いから空いてるはずなんだけどな。

ウンチしたいから人が少ない方が嬉しいけど、仕方ないよね。でもどこからかウンチの匂いがあるし、朝食後でウンチしてる子がいるっばい。それなら私も気兼ねなくできるかな……。

今空いてるのは並びの洋式便器と和式便器だ。

建物が古いから全部洋式じゃないのがマイナスなんだよね。床の工事跡を見るにもととは全部和式だったんだけど、和式を一つだけ残して便器が改修されたっばい。全部交換すればいいのに。今どきの女の子が不衛生で体勢もきつい和式トイレで気持ちよく排泄できるわけないんだから。

空いてる洋式個室の隣は誰か入ってるけど、ウンチだから座ってゆつくり済ませたいかな。洋式トイレの方に入り、立て付けが悪くて軋むドアを閉めて、力を入れないと入らない鍵を押し込む。

寮のトイレ、古いから嫌な匂いがあるし床は水洗いのタイルだから



ごろろ ぐりゆるるる ぐりゆりっ  
「ん、うーん……」

お腹が痛くなってきた。ゆるいウンチが降りてきて、お腹ぐるぐるしてるっ。早く全部出し切ってすっきりしたい。

「ふうう、んっ、……あっ！」

ふす ふすーっ ぶっ！

ぶびっ！ ぶびびびーっ！

息みすぎて音の大きいオナラ出ちゃった!?

お腹がごろごろしてるからガス降りてきちゃってる、ゆっくり、そっとすかさないと……。

ぶすう ぶっすうー ぶすぶすぶす

ぶっ！ ぶうくくくっ ぶりぶりぶり

三日くらいウンチ出てないままお腹がゆるんだから、くさいオナラがたつぶり出てくる……。朝食後の混んでるタイミングで催さなくてよかった。朝にウンチしてたらわざと聞こえる声で下品とか言われるんだもん……。他の子だつてウンチしてるのに、私だけ。混んでて並んじやうと個室に入る姿を見られるから、できるだけ平日の朝はウンチしたくないけれど、学校でするよりはマシ。

今日は空いてるから誰にも見られてないし隣は下痢っぽいし、陰口言われることはないと思うけど、やっぱりウンチで時間かかるのはイヤだから早くかつ静かに済ませよう。

「うん、ん、くっ、んん」

ぶすす ちに ちにちに……

ぶっ ぶす ちに ちちちゆるるるっ ぶりぶりぶりっ！

ぶりっぶりぶり！ ぶりりりゆりゆりゆりゆりゆるるるっ！  
ごろごろ ぐりりりいっ

うう、ゆるくてくさいのいっばい出る。水を流して音消しをした、匂いの元を流したいけど閉めたドアには大きな紙に『節水』と書かれて貼ってある。古いトイレだから一度流すのにたくさんの水が必要だからだと思うけど、今どき消音器もないのはちよつとなあ。

「はあ、ふう。ふうう」

けっこうウンチが出たと思うけど、まだお腹痛い、便意が治まらない。ぶかぶか浮かぶゆるいウンチを便器に残したままでお腹がよくならなくて流せないから、個室どころかトイレ中までウンチのおいが広がってそう。

まあ先にウンチしてた隣の子も下痢が治らないみたいだから、私だけのおいじゃないけど。さつきから絶え間なくピチピチブリブリ音がしててちよつと不愉快。それに、私が入ってからもう三分は経ってるけど誰も個室を出入りしてないから、端の洋式もウンチかな。

「ウンチ用のトイレがあればいいのに」

あ、ついつい声に出しちゃった。

みんながみんなウンチなら気が紛れるし、おしっこしたいだけのみに嫌な顔されないうね。寮のトイレでウンチはお互い様だけど、私だつておしっここのときに入った個室がくさかったら気分よくないし。

「ん、うん、ん……。うーん、うーん」

お腹痛い、ウンチ出ない、早くトイレを出たい……。

部屋着の上着をめくって、お腹を擦りながら口を閉じて息む。背中を丸め、足を開いて顔を歪めてうーん、うーんってしないといけない

なんて、こんなの絶対誰にも見られたくないよ。

そういえばなんでお腹の調子良くないんだろう。今日の体調は珍しく快眠で良いぐらいのにな。寮の夕食、傷んでたかな。でも変な味じゃなかったし、隣の子は下してるけどトイレが混んでないなら食中りじゃなさそうだよね。

たまたまお腹ゆるくなっただけだよな？

ぐるぐるぐるっ

あ！ お腹の奥の軟便がやっと降りてきたっ。痛みを伴って、肛門のすぐ裏に圧力と熱量が溜まってきているのを感じる。

トイレにいる子みんなウンチなんだし、もう思いつきり踏ん張ってすつきりするっ！

「う、んっ。うん、うん……」

ぶびっ ぶす ぶすぶすぶす

「ん、うん！」

ぶりゅ！ ぶりゅりゅ……

「んん、うんっ」

ぶりゅぶりゅぶりゅ べちゃ ゆるる にちちち にちゅんっ！

ぶりぶりぼとぼとにちねちぶりぶりぶりっ！

ぶぼっ！

「はああ……っ！」

細くてゆるゆるの、柔らかい軟便ウンチいっぱい出た、あつ。

すっごい恥ずかしい音が出たけど、籠もってる子もまだ出てきてないぐらいだし大丈夫。

しばらく軽く息んで残便も出ないのを確かめてから、備え付けのト

イレットペーパーを取ってお尻を拭く。できれば温水洗浄があればいいのにな。薄くてガサガサの紙だからたくさん巻き取って、ふわふわさせてお尻を拭う。ウンチがゆるかったから紙いっぱいにとりと茶色がついてる。

あまり紙を取りすぎても咳払いとかで遠回しに無駄遣いを指摘されるから、汚れた面は折りたたんできれいな部分で拭き直す。最初の紙じゃ拭ききれなかったから少なめに新しく取り、三回折り畳んでようやくお尻をキレイにすることができた。

うわーお、三分と未消化気味のウンチで便器の中がいっぱい。洋式でも古い便器だから水の張ってる面積が広くて、二回分の紙じゃ浮いたウンチが隠しきれない。

におい対策で蓋を閉め、水を大の方向で流す。トイレの外まで聞こえる大きな水流音が止んでから蓋を開け、流し残しがないのを確認してようやくトイレを出ることができた。

「はあ……。あ」

寮長が、トイレの入り口で私を睨んでる。

ドアが開いて空き個室になったここに向かって歩いてきた。

「私大きい方したばかりだから、他の個室の方がいいかも？」

「構いません。私も大ですし、そこしか空いていないのですから」

よく見たら洋式の個室はまだ閉ざされたままだけど、和式はずっと誰も使っていない。寮長もしかして、ウンチのときは和式だどできないのかな。

和式空いてるから誰かが待ってると思ってなくて、大きい音出しちゃった……。でも寮長はまだ優しいから、露骨に嫌な態度取らない



からまだいいけど。

「それとミカ様。静かに用を足された方がいいですよ。古いお手洗いで壁も薄く隙間も大きいですからね」

「あはは、ちよつとお腹の調子よくなくて……。気をつけまーす」  
遠回しに嫌味言われちゃった。ウンチの音、隣の下痢ピーの子の方がひどかったただけだな。お腹痛かったんだから逆に心配してくれてもいいんじゃない？

他の子と違ってわかりやすい嫌がらせやいじめはしてこないからまだ優しいけど、別に言わなくていいのにな。

「まあいつか。スッキリしたっ」

トイレ横の洗面室で手を洗い、部屋に戻る。

お腹はじくじくするけれど、軟便を催した名残かな。でも便意は解消できたからその後の服選びは捗った。

「うん、これでよし☆」

ナギちゃんがサイズが合わなかったからと譲ってくれたワンピースと、先生が買ってくれたプレスレット。シンプルだけど今できる一番かわいいオシャレかな。

もつとお金を貯めて、着飾りたいな。

着替えもOK、お化粧もバッチリ。そろそろ時間だし出発しないと……その前に、トイレっ。タイミングがよかったのか今度は無人だったので洋式の個室に入る。まずはおしっこを出し切り、

「うーん、うーん。……でない、みたい」

お腹は痛くないしウンチもしたい感じはないけれど、念のためウンチが出ないかの確認をしておく。一分くらいお腹を撫でながら力を込

めて息んでみる——うん、ウンチは出ないみたい。腹痛もなくなったし、これならデート中に催すことはないかな？

「ふう」

なるべく先生といるときにおしっこも行きたくないからね。事前にトイレも済ませてバッチリっ。

おしっこを出して不安も流してトイレを出ようとすると、駆け込んでくる誰かとぶつかりそうになって抱き止める。

「おっと」

「あつごめんなさ——ミカ様！」

誰かと思つたらあの子だ。

「大丈夫？」

「はいっ。ミカ様、オシャレをされているってことは、これからデートですか？」

「うん！ 今から出発するよ」

「そうでしたか。んっ、いたた」

「ぶつかって怪我しちゃった？」

「いえミカ様のせいではなく、その、お腹が……」

私から離れたあの子は背中を丸めてお腹を擦ってる。

「すみません、朝からお腹の具合がよくなって」

「お腹痛いんだ？ 邪魔してごめんね。私のことはいいから早く行ってっ」

「お見苦しいところを見せてしまいました。うう、失礼します」

お辞儀をしながら洋式トイレに駆け込んでガタついたドアと鍵を無理やり閉めた数秒後、激しくて水っぽい音が響き渡った。

下痢、してるんだ……。中で下してるのがあの子だとわかるからなのか、あの子とは仲がいいからなのか汚いという気持ちは少なかった。かわいそう、大丈夫かなって感情の方が強いくらい。

私がいたら恥ずかしいよね。早く洗面室行こつと。

「……まさかね」

同じくお腹の具合が悪いつてことは同じもので中つた？ 昨日の紅茶で中つたのかな。でも朝から下痢つてことは私も下してないとおかしいし、偶然かな。それにあの子の紅茶の淹れ方も茶葉の管理も完璧だから、大丈夫のはず。この寮に来てから何度もお茶に誘ってもらつて飲んでるけど、不調になったことはないからね。

……疑つちゃダメだよ。

ま、誰だつて不意に下すときはあるよね。今日みたいにゆるくなるときはあるけど、私は滅多にお腹壊さないからお腹弱い子はタイヘンだね。セイアちゃんとか病弱だからよくお腹壊してたし。

「さて、と」

晴天に祝福されながら、私は待ち合わせ場所を目指した。

ヒールの足音が弾む。

＊

「先生、おそーい！」

「ごめんごめん」

待ち合わせの一二時から一〇分ほど遅れて、先生が駆けて到着した。「いいとこまで仕事終わらせてたらバス乗り遅れちゃって、そしたら

ヘルメット団に絡まれてね」

「言い訳するならもつと上手にしくちやダメだよ？」でさ先生」

「ん？」

忙しいのに私のために午後を空けてくれたんだから、少し遅れたくらい別にいいよ？ でもね。

「なんでスーツで来ちゃつたの!？」

「え？ 変かな」

先生はいつもオフイスで着ているくたくたの黒スーツで、お出かけ用にアクセサリーを着用したりネクタイを変えているわけでもない。身だしなみに気をつけたのか癖の強い髪を整えている痕跡が見えるけれど、走ってきたせいで崩れてるし。

「私とデートなのにおかしくないかな？」

「あーこれそういうやつだった？ ごめんね、気が利かなくて」

「オシャレしちゃうって浮かれてるみたいだね、私」

「そんなことないよ。普段ミカの私服見られないから、先生得しちゃつたな。ワンピースもかわいいね」

「そ、そうかな……。じゃあ次遊びに行くときも着替えちゃおっかな」よかつた。ちゃんとかわいいみたい。

たまに先生、私にそっけないときがあつて嫌われてるのかなつて思つてたけど、違うんだよね。

嫌いだつたらお買い物に付き合ってくれないよね。でもスーツで来たのはちよつと残念かも。

「授業の道具を買うつて聞いたから仕事感覚だったなあ。先生は私服とかあんまりないからスーツの方が楽なだけだな」

「そんなのダメダメ！ 先生のことだから近所のコンビニくらいならスウェットで出かけるんだろうけどさ」

眉間に皺が寄った。凶星の顔だ。ちゃんと先生してるときは最低限取り繕ってるけど、誰も見てないとダサダサなんだ……。

服装とか雑お茶会とか、先生のそういうズボラな面を最近をよく見せてくれるようになってきたのは嬉しいけど。でもやっぱりデートのとくくらい素敵な格好で並びたいな。そもそもデートと思われてもないんだけど。

あくまで先生と生徒。その枠を外れることはできていない。

「今日はスーツで許してね。じゃあ、裁縫道具買いにいこっか」

「せっかくお昼時に集合したんだから、まずはランチじゃない？」

「そういうえば朝食も抜いちゃったしなあ。お詫びに先生がごちそうするね」

「いいの!? やったあ☆ 先生大好き！」

「はいはい」

「あつ」

横から腕に抱きつくと、すかさず先生のもう片手が伸びてきて。

——やんわりと押し返された。

「でも先生も金欠だから期待しないでね。お店探そうか」

また、やつちゃった……。

先生の好意にちゃんと嬉しいアピールしたかっただけに、うん本当に嬉しくて、でも私なんか抱きつかれたら迷惑だったかな。おおげさに喜びすぎたかな……。うざかったかな。それとも思っていないことをしないでいいよってあしらわれたのかな。

「せ、先生！ 私ハンバーガー食べたいな」

「もしかしてミカってばジャンクフード食べたことない？」

「ハンバーガーは食べたことないかも？ だからいい機会かなって」

「うわ〜それはいいね！ 食べよ食べよ！」

安い価格帯のジャンルって聞いてたからとつきに看板を見て言ってみただけど、先生が喜んでる。先生もハンバーガーの気分だったのかな？

先生の顔が見たくなくて、私の顔を見られたくなくて一歩下がって歩いててよかった。鏡がないとわからないけど、泣きそうな顔でほっとしてると違う。

自分で自分がわからない。

『魔女』という単語をよく投げられる。石よりも尖っていて痛いもの。ずしりと重いのに、だけどなぜか軽々しく投げられるもの。

先生に嫌われたくない。

だから先生の嫌がることをしちゃだめなのに、抱きついちゃった。

過剰なスキンシップが苦手なの身をもって知ってたはずなのに、短慮って私のことを言うのかな……？

こうやって休日にお実つけて一緒に出かけて、楽しいって思う私と迷惑かなって後悔する私がいる。

知らない子に後ろ指を差されても別に気にならないのに、先生に距離を取られたら悲しいよ。優しくしてほしいからいい子でいたいのに、知らない私がいるのかな。

通りかかったウインドウにかっこいい先生と惨めな私の姿が映る。先生と一緒にんだから、ネガティブなこと考えちゃダメ！ せっか

くのデートなんでもん、楽しまなくちゃ。

「ミカ？」

「えっ、何かな」

「お寿司とかの方がいい？ 回らないのは難しいけど」

「うん！ 先生がイヤじゃないならハンバーガーがいいの」

暗い顔をしてたら心配かけちゃう。

もう先生の手を焼かない、いい子でいなくちゃ。

だけどやっぱり、いつでも気にかけてほしいな。

「え〜なにこれおいしい〜！ サンドイッチみたいなののパワーのある味でびっくり！」

「初めてジャンクフードを食べるお嬢様だ！ こんなコテコテのテンプレートみたいなホントにあるんだ。ほらポテトも食べてね、シェイクもおいしいよ！」

先生とデート、楽しいランチ、初めて食べた味。

さつきまで脳裏で渦巻いていた不安は濃いソースの風味で吹き飛んでしまった。

「ちなみにカップラーメンって食べたことある？」

「先生がよく食べてるやつ？ 食べたことない！」

「そんなの絶対食べさせたいじゃん！ でも、さすがにナギサに怒られそうだなあ」

ナギちゃんが怒るならむしろ食べてみたくなるから、今度コンビニで探してみよう。でも先生がリアクション期待してるから、これで遊びに行く理由ができちゃった。

どしっとお腹に溜まるランチに満足して、私たちはハンバーガー

ショッピングを後にした。

\*

学生街のショッピングモールなので参考書や授業で使うツールが充実していて、お目当ての裁縫道具はすぐに見つけた。あるかどうか特に調べもしていなかったけど、さすがの品揃えだった。先生もついでに文房具をいくつか買ったみたい。

「先生、せっかくだし二階のお店行こうよ！ ここね、昨日調べたんだけど、先週に新しいお店できてSNSで話題なんだって！」

不意に先生が立ち止まって、極めて平坦な口調で、  
「目的の裁縫道具は買ったよね」

きゅ

つと左の胸が鋭く捻れて跳ねた。

「あ。えっとね、先生」

「ミカ」

怒ってる。

おいしく楽しくランチをした後なのに、デザインや使い勝手まで親身になって意見を出してくれて、ついさつきまで盛り上がったのに。すっごいデートみたいだなんて思ってたのに。

授業の道具を買う付き添いで約束を取り付けたのに、調子に乗ってショッピングしようとしたから、怒ってる。先生がちよっと問い詰めモードに入ってる。

こういうずるをする、先生がすぐ怒るようになった。

私、またやっちゃった？

何か言わなきやダメなのに、言葉が出て来ない。俯いているから先生の顔色がわからないし、何も言ってくれない。

先生のからだがちよつと揺れている気がする。かゆそうにつま先が床をノックしている。

「ミカ……」

やけに長い溜めに背筋がぞつと痺れた。

「あーごめん無理！」

「へ？」

「荷物持ってて！ トイレ行ってくる！」

「えっと、先生？」

「ちよつと長くなるからここで待ってて！」

押し付けるようにカバンとさっきの買い物の袋を私に持たせて、先生はトイレの案内看板を追って早足でいなくなってしまった。

お説教を後回しにしてまでトイレ行きたいなんて、先生お腹壊しちゃった？ 感情の急転直下にほつとして、くらくらする。

まだ心臓が微痛を伴う脈動を打っている。

先生にいやな思いをさせたときの、にがてなりズム。

「ふふふっ」

苦しい心音も、トイレに駆けていった先生の背中を思い出したら和らいできた気がする。

先生、ずっとウンチしたいの我慢してたんだ。

身体が震えてたのもつま先が動いてたのも怒りを溜め込んでたんじゃなくて、お腹痛くてそわそわしてたのかな。そういうば学校用品

シヨップにいたときも不自然に立ち止まってたし。

生徒にかっこつけたいはずなのに、お腹痛いのを我慢できなくてお説教を中断しちゃうなんて……。長くなるからなんて言っちゃったらウンチをするって宣言してるも同義なのにね。それにランチの後に一緒にトイレ行つたから、おしっこのはずないし。

「先生、大丈夫かなー」

私だから、ウンチしたいの優先してお説教をやめたのかな。会つたばかりの生徒とか、知らない子相手だったらお腹痛いの押さえつけてかっこつけそうでもん。お財布や鍵が入ってる大事なカバンも持たせちゃってさ、私がわるい子だったらなくなっちゃうよ？ 手提げの小さいカバンくらい、トイレに持ち込んでしまえばいいのに。

思い至らないで浅はかなことをしてしまうけど、盗むとか壊すとか悪いことはしないんだって、信頼されてる——と思つていいのかな。いいよね！

「先生、お腹弱いんだよね」

近くに空いているベンチを見つけたので座って、恐らく先生が目指しただろうトイレの方向を見つめる。

先生が露骨に大きい方をすると言つてトイレに行つたのは今日が初めてだけど、かかった時間とか顔色とか頻度とかで、お腹痛いのかなって察してしまうことは何度かあった。

コーヒーばつかり飲むからだよ。カフェインの過剰摂取は気分が悪くなつたりお腹がゆるくなつたりするらしいし。ランチのときも大きいサイズのアイスコーヒー飲み干してたから、お腹を冷やしたのかな。それともたくさん食べたから？

私も初ハンバーガーで興奮しちゃって、追加注文しちゃったけど大丈夫だね。お腹に溜まる感じだったしポテトとか挟んであるお肉とか油っこかったけど……。

「先生、まだかな。……ん？」

ぐるぐる……。

した。

嘘みたいに綺麗なタイミングで、お腹が鳴った。

お腹の管が入り口から出口の方向に波打って、中身のどろっとしたものを攪拌して鳴った、不気味な音。

……ち、したい。

お腹に違和感を感じたと同時に湧き上がる腹痛と、排泄欲求。

ウンチ、したい。

ぎゅるるるるっ　ごろごろぐびぐびびっ！

どうしよう、ゆるいウンチがしなくなってきた！

「トイレいきたい……」

先生の姿を探してさまよっていた視線が、自然と天井に吸い寄せられる。さっき先生が頼りにしていた、トイレへの案内看板。矢印の通りに進めば、トイレは見つかると思う。

でもあの先にあるトイレは、今先生がウンチをしているはずのトイレ。個室に入るときに入れ違ったら私も大きい方をするって思われるかも。だってランチの後にトイレに行ったのは私も同じ。おしっこを済ませた直後だから、ウンチと思われても仕方ない。

それに先生は「ここで待ってて」って荷物を預けてくれた。はぐれないように待っててっていうお願いを無視したら怒られるかもしれない。

ないし、我慢できないでトイレに行って再会したら、

『お腹痛いの我慢できなかった？ それならしょうがないよね』

って許してくれるかもしれないけど、ちょっと待つこともできないくらいお腹壊して耐えられなかったんだって目で見られちゃう。

先生は優しいからデリカシーのないことは言わない。けれどデートの日に下痢ピーして汚いウンチした女の子って、内心では思われてしまふんだ……。

そんなの、やだよ。

ウンチしたいの、我慢しなきゃ。できれば寮まで、せめて先生と別れるまで。一人のときに済ませないと。

ごろごろごろ

「うう、おなかいた……。ッ！」

ごろろ　ゴロゴログルグルギューッ！　……ゴブッ

穏やかに波打っていた汚泥が、粘膜の壁面をぬた打ち回る。泡立つ。ウンチの管が悲鳴を上げる。

お腹、壊したかも……。

今すぐトイレに行きたい！

お腹が痛い、ウンチしたい、ゆるいだけじゃなくて下痢っぽいのが出そう。朝にお腹痛くてしなくなったのは大したことなかったのに、なんでこんな急に！

やっぱり何かに中ったのかな。風邪とか引いて具合悪化したのかな。それとも、ランチのハンバーガーでお腹びっくりしたのかな。普段食べない高カロリーだったし、揚げ物もたくさん食べたし。

「うう。トイレ行きたいけど、先生まだ……？」

お腹弱い先生も胃もたれしてお腹痛くなったのかも。これだと時間かかるよね。

もう早く帰りたい。

先生と一緒に帰ったならトイレなんか行けないし、お買い物を楽しむ余裕なんてない。それに先生も帰りがたってるんだし、早く解散してこっそりトイレ行こ……。

ランチ後のおしっこだって、トイレ行きたいって言ったら先生もついてきたから仕方なくだし、個室だって先生に先に入らせて音の聞こえなさそうな一番離れたところ使ったぐらいいだもん。

ウンチのときに一緒にいられたら終わり。

百年の恋も覚めるウンチのにおいと爆音で生徒生命は終わり。

ウンチなんかしない、かわいくて魅力的な女の子でいなくちゃだめなんだから。

前身から熱が引いてお腹だけが火照っていくのを自覚する中、先生は小走りで居なくなった方向から戻ってきた。

「あゝごめんお待たせ〜！」

「もう先生遅いよ！ はい荷物」

「ありがとうミカ。突然いなくなつてごめんね」

「具合悪かったなら仕方ないよ」

先生に向けた言葉ではなかったかもしれない。

「ミカと一緒にいるときに、これは恥ずかしいなあ。朝も不調だったのにラージサイズのアイスコーヒーはよくなかったね」

「あはは。先生カフェイン大好きだもんね。じゃあ帰ろっか」

「ううん、せっかくだしちょっとだけお店巡りしようかな」

「えっ」

数分前なら心ときめく一言のはずだった。

「さっきは嫌なこと言つてごめんね。先生ずっとお腹痛くてイライラしててミカに当たつちやつた」

頬に灯る紅は羞恥の朱と奮闘の赤。生徒といふのに下痢したのが恥ずかしくて、お腹が苦しくて踏ん張ってきたのがわかる顔色だった。大人の先生もウンチをするのが恥ずかしいなんて思わなかった。

でもね、ちょっと待つてよ先生。

「ミカの前だとトイレ行きづらくて帰りがたつたなんて、失礼だったよね。でも先生もうスッキリしたから、大丈夫！ お詫びつてわけじゃないけど、もう少し遊ぼっか」

「あ、えっと、その」

先生と遊びたい。デートしたい。洋服見てどれが似合うか選ぶ合つて試着して、先生の好きな服を抱えて帰りたいよ。

でもウンチしたいの！

先生が私に下痢ピーだと知られたくなかつたみたいに、私だって先生に下痢したくて我慢してるなんて思われたくない！

遊びたいとウンチしたいが争い合つて言葉が出ない。せっかく先生と休日を通り越してると、先生が機嫌よくなって手を差し伸べてくれるのに、私のお腹が快諾を許さない。楽しみだったお店より先にトイレに行きたい、試着室じゃなくて個室に入りたい！

「お買い物したいけど……」

「イヤになった？ 先生が嫌な言い方したからだよね。今度は素直に誘つてくれればいいから。ほら、今日はもう怒つてないから、行こ？」

「う。うん。ちゃんとエスコートしてね？」

バレずにトイレに駆け込む嘘をつけなくて、立ち上がる。汗ばんだお尻に下着が貼り付いていた。

「今の若い子のトレンドとか知らないんだけどなあ。いつか。ミカの好きなものを教えてね」

苦笑いする先生の柔和な表情がたまらなく好きだ。キリつとした大人の顔つきが私達に近寄ってくる瞬間が大好きだ。

でもね先生、今じゃないの！

ゴロゴロギョルギョルびゅー！

いい雰囲気なのに、ウンチしたい〜っ！

「ミカはどのお店行きたかったんだっけ」

「えっとね、ここ〜」

たまたま案内看板の近くにいたので店名を指差す。

「じゃあ行こっか！ ……先生ここ不慣れだから、案内してもらおうかな」

「え〜！ エスコートお願いしたばっかりなのにな〜？」

先生の期待に応えないといけないから先導して歩いて行く。

ゴロゴロ ギョルギョル

うう、お腹痛い、すぐく鳴ってる。聞こえてないよね？

それにお尻を引き締めて歩いてるから、シルエットでウンチ我慢してるのバレルかも……。今日はゆったりワンピース着てるからわかりづらいよね？

どうしよう、お買い物終わるまでウンチの我慢できるかな。ついでうか、下痢っぽい押し寄せてるのにちゃんと楽しめる余裕なんかあ

るわけないよね!?

せつかく楽しい時間になるはずだったのに、なんでこんな悲しいことになるのかな……。別に私、何も悪いことしてないのに。

トイレ、近くにあるけど、どうしよう、先に済ませようかな。

「あの、先生」

——先生、私もトイレしたいから、行ってくるね。

「ん？」

「えっと、楽しみだね」

「ミカが楽しみなら先生も嬉しいな」

やっぱり、言えなかつた。

お腹痛いってバレたら、ウンチ我慢してるって気づかれると思ったら、たった一言を口にする勇気が出てこない。

朝にお腹痛くなつていっぱい出したのに、こんなに腹痛ひどくて便意もヤバいんだもん。絶対に時間かかってウンチってバレちゃう。

やっぱり、我慢しなきゃ。

「先生、ここだよ。わあ、かわいい下着がいっぱいだね」

「ランジェリーショップだったの？」

私が先生と行きたかったのは下着屋さん。SNSで話題かつ新装開店ということで店内は若い子で賑わっており、奥に見える試着室も空き待ちができてくるくらい。

ランジェリーのラインナップはビビッドな色合いかつレースや刺繍の多い、まさにかわいい武器って感じ。先生の下着を見たことはないけれど、派手で鮮やかなタイプのブラやショーツには緑がなさそうだから恥じらって困惑する姿を見て楽しもうと思つてたのに。



「せつ、せんせ、どうか。こういうの持っていないんじゃない？」

「あるわけじゃないやんつ。大きいとカワイイの少ないし、こんなの私に似合わないし」

「そんなことないよ。私が、ん、選んであげるね。でも先生のバストサイズわからないし、採寸しよっか☆」

ちよど手の空いていた店員さんを捕まえ、メジャーで胸囲の測定をする。自分のは把握してるけど先生のはわかんないし、自然な流れで先生の胸囲を知っちゃおっと。

さつと測ってもらい、次は先生の番。

「恥ずかしいからあっち向いてて」

「なんで？ 女の子同士なんだから見てもいいよね」

「あつ、ちよつと待ってください、あつ、も〜！」

店員さんはお構いなしに先生の後ろから手を回して胸囲を測っている。顔を赤くする先生の前に周り、ちよつかりメジャーの数字を確認した。

「へ〜！ 先生私より大きい……」

「数字見るのマナー違反じゃない？」

「私のも教えたからあいこ」

当然ウエストも把握して、先生のバストサイズが私の手中。

「じゃあ先生にピッタリの探そうつと。野暮つたい先生にピッタリの一着選んじやうね☆」

「あーもうわかった！ それなら私はミカの下着選ぶからね!?」

本気顔の先生が歩幅大きめに陳列棚に近づいていく。

わ、わお。

冗談交じりで提案しようと思つたことを、まさか先生の方から口にしてくれるなんて。

先生が私のために似合うランジェリーを選んでくれて、それを着用できるなんて……こんなの私だけだよ？ いざというときに着ちゃってさ、先生を誘つて——キャーッ！

ギョルルググググググ……

先生が離れていったのをいいことにお腹を折つて力を込め、強烈な便意を抑えつける。

ウンチしたいウンチしたいウンチしたい。トイレ行きたいトイレ。

朝の軟便で弱つていた胃腸にハンバーガーは重かつたのか、思つた

以上に下すのが早い。

急に下つたせいか攪拌された空気が出そう……オナラもしたい。

でも混雑したお店ですかしたら絶対に誰か気づくし、もし私がオナラしたつてバレたら先生に伝わるかも。

絶対に解散するまで我慢しなくちゃ。

「ねえねえこれミカに似合うと思うな〜！」

さつそく先生が上下セットを持ってきた！ 便意で集中できなくて何も選べないのにつ。

「まだ先生に合いそうな選んでないから、待つて」

「いいいいいよ！ 先にミカの決めちゃお。一緒に試着したら見せ合いつこできないでしょ？」

セットを無理やり持たされ、背中を押されながら試着室へ追いやられる。先生だめっお腹痛いのに揺らさないで！

「着替えたら先生に見せてね」

「う、うん……」

運良く空いていた試着室の中は普通よりも広く、汗拭きシートが用意されている。結構快適なつくりだ。あ、サイズ違いのベチコートが何着かハンガーにかけてある。試着ブラを見せるときにワンピースだと下半身まで晒さないといけないから、こういうスカートタイプの穿きものが準備されてるの嬉しいよね。

下着屋行くのにワンピースで来ちゃったから助かる〜。

グリュルリユルル……

お腹、痛い……。それにオナラもしたい。

「せ、先生？ いる？」

小声で呼んでみるけど、返事がない。そつとカーテンを開けて様子を窺うと私の方に背を向けて近くの商品を眺めていた。顔を出して呼んだら来てくれる距離だから下着を探しながら待つてるのかな。

「よし……んっ」

ふすっ ふしゅううううっ

しつかりとカーテンを閉ざし、できるだけ奥でお尻を突き出し、私は公共の空間で放屁をした。カーテンで半個室になってるからオナラをしても見られないし、上の空間が空いてるからにおいが逃げてくれるはず……。でも音は筒抜けだから、慎重に……。

ふすっ ふしゅううううっ ぷびぷびぷび

うう、くっさい！

下痢のウンチがお尻の出口に溜まってるから、下痢のにおいを吸ったガスが試着室に充満してる……。こんな臭がれたらもう先生に軽蔑されちゃうよ。

ぷっ！ ぶりぶりぶり……ぶしゅっ

お腹に全神経を注いでガスを抜き、ひとときの快楽を得る。ずっとしたかったオナラを出して排泄欲を満たしたことでお腹の圧力と便意がにわかにならんだ。

今のうちに試着を済ませてしまおつと。ワンピースを脱いでブラも外し、先生が選んでくれたブラを着けてみる。

あつ、かわいい！ パープルの生地で結構大人っぽいけれど色味が薄いから背伸び感がないし、レースたっぷりで勝負下着感があつてすっごく好きだな〜。

組み合わせのショーツもレースがついてるし、こっちは一部ボーダー模様なんだね。私のヒップサイズと合っていないから変えないといけないけど、一緒に着用したらただでさえかわいい私がつと魅力的にならない？

も〜、先生つてばこういうランジェリーで押し倒されたいんだ？

「ミカー？ そろそろ試着できた？」

「うん！」

「じゃあ開けるね」

「えっ、ちょ、」

つてことは今先生に私の半裸見られるってこと?! 試着見せ合いつてことは先生に見せるのはわかってたけど心の準備がそれに試着室にオナラのおい残つてないかなあももう先生つてば

「わ……!! ミカスタイルいいから大人っぽいの似合うね！」

こういうときにデリカシーないんだから……。

私の許可も聞かずに開け放たれたカーテンと、流麗な両目を大きく

見開いて見入っている先生。恥ずかしいのと褒められて嬉しいのがごっちゃごちゃになって、頭が熱い。

「ほら腕で隠したら見えないよ？ サイズ合ってる？」

「ピッタリだから、だいじょうぶ……」

うぶそうな先生をからかかって楽しむつもりだったのに、なんで私の方が手球に取られちゃうかな？ 本当に人たらし！

「ミカの好みだった？ 先生自身あるよ。よく妹の洋服とか選んでたし。他に似合いそうなあつたから、持ってこよっか？」

「ううん、これがいい！ これ買っちゃおうかな。……んうつ。あ、着替えるからカーテン閉めるね！」

先生が無限に褒めてくれるからずっとお話していたかったけど、狙い澄ませたかのように腹痛が強烈にノックした。痛みで歪んだ表情を見られたくなくて慌ててカーテンを閉めてしまった。

ギュルリルリルル ゲリユリリリ……

ウンチしたいウンチしたいウンチしたいっ！

カーテンが目隠ししてくれるのをいいことにお腹を折って必死にお尻を締め込む。行儀よく立ったまま平静を装えるお腹具合じゃなかった。

お腹をかばいながら着替え直し、便意が弱まるのを待つてから試着室を出た。

「お待たせ、っ。ショーツが少し大きいサイズだから、小さいのに替えてもらうね」

そそくさと先生の前から立ち去り、店員にサイズ変更をお願いする。ショーツの試着は衛生的にマナー違反だから、自分に合うサイズを聞

違えないようにしないとね。

「じゃ、じゃあ次は先生の下着ね！」

お腹痛いお腹痛いウンチしたいウンチ。

「えーやっぱり私もいる？ 安売りのでいいんだけどな」

トイレっトイレっトイレ、もう帰りたい、でも。

「私も恥ずかしかつたんだから先生も、」

先生ともっとお買い物、でもトイレ、ウンチ。

「……ミカ、具合悪い？ なんか顔色悪いよ」

「ううん。そんなことないよ」

「そう？ ならいいけど。先生のは下着じゃなくてスーツに合うアク

セとかにしよう？ 代わりに先生が買ってあげるね」

「だ、だいじょうぶ！ お金はあるから」

先生は私を持ったままの下着のハンガーに手をかけ、ウンチを我慢するのに必死な私から手早く奪い取った。そしてにこりと笑い、さつさとレジへ行ってしまった。

実はお小遣い厳しいから助かるけど、先生にもらつてばっかりで気が引けちゃうな。

っていうかお腹痛いのバレかけてた。先生の下着選べなかったのは残念だけどこのまま解散してすぐトイレに行かないと、もう。

「じゃあ支払いはクレジットカードで、はい一括です」

ウンチ。お店出たらトイレ。

「決済完了しました。お買い上げありがとうございます！」

解散じゃなくてもトイレっと言う。勇気を出して、ウンチっつて。「はいどうぞ。ミカが最近がんばってる分、ご褒美ね」

お店出たらトイレって言う。お店出たらトイレって言う。トイレ。

「ありがとう〜！ 絶対大事に着るね！」

ゴリゆゴリゆゴリゆ……

「あ」

ぶちゆ、つ

「ミカ？」

「すいません下着のタグ全部切ってもらえますか」

先生から受け取った紙袋をすぐ店員さんに渡す。

「今着用されるんですね。わかりました！」

「そんなにおニューの下着嬉しかったの？」

「うんそうなの早く着たいなあ」

もうだめおなかないたいウンチしたいトイレいきたいウンチ出る。

「タグ切り終わりました。切ったタグは袋の中にありますので」

「じゃあトイレで着てくるから待っててね！」

「えっ試着室借りた方が早いよ」

「混んでるからトイレでいいっ！」

素早く袋を抱きかかえ、一目散にお店を出てトイレへ駆ける。

もうだめ我慢できないウンチ漏れちゃうッ!!

ううん、漏れちゃった。

走って擦れるお尻の肉の間で不吉な粘つきを放つ液体の正体は？

染み付くように肌を灼く感触は、紛れもなく液状便。

私、先生が隣にいたのにウンチをチビっちゃった……っ！

ランジェリーショップから最寄りのトイレはすぐだった。できることなら先生の来る可能性を排除するために離れたトイレに行きた

かったけれど、もう限界だった。

ウンチがしたいっ!!

人におつからないように最小限の注意を払いつつ、お腹をかばってトイレに駆け込む。休日でショッピングモールは盛況だったから心配だったけれど、個室が一つだけ空いている！

ウンチできる！ ウンチだせる！ ウンチでる！

「と、といれ！」

運良く空いていたのは洋式トイレ。もう便器があればどこでもいい！ 飛び込み、叩き閉め、押し込み、投げてお尻を向けて捲って脇に挟んで下げて崩れ落ちて

もうだめウンチでる！

「ふうふううーッ!!」

ブリブリブリブリビチビチビチビチー——ッ!!

ブポブポブポボドババババッ！

ブヂーッ!!

下痢便の噴出感覚を失いかけた肛門を震わせ、体温の溶けた熱がいたずらにお尻を掻き穿り、おぞましい音が私に結果を突きつける。

う、ウンチ、間に合った……!!

もう我慢も耐久も必要ない。地に足つけて支える体重は便座に預け、閉ざすべき肛門の直下は水を湛えた陶器が据えられている。

腹の暴れるままに、出している。

「ううううんっ！ うぐうううっ！」

ブチチベチビチビチ！ ブポポッ！ ブババババチッ！

ビジュューッ！ ビヂッ！ ビジュビジュブジジビジュッ！

軟便質を通り越して、完全に下痢だった。

ろくに消化もされていない摂取物が大量の水分を蓄えて噴き出している。腹を下して栄養を吸収される暇もなく腸管を駆け下り、排泄される最後まで私を苦しめる。

「ふううーッ、ううッ、うああ……おなかいた、あ」

ウンチの出口一歩前、直腸をひたひたに満たしていた下痢ウンチは先を争う勢いで出ていった。けれどたった一息でお腹の不調が治まるわけがなく、便意がなくなるはずもなく。

ゴロツゴロゴロギユルギユルギユリイッ

「ふーッ、ふーッ」

お腹が唸る。軋む。捻れる。

壮絶な腹下しで奥の老廃物が流れてくる足音に苦しみながら、安息の上で息を整える。先生の前で清楚を固定する必要もなく、失敗と蛮勇で駆け引きする段階を越え、催しても安心して弛緩できるこの空間と姿勢がただただ、気持ちよかった。

「もつと、早くトイレ来れば、よかった」

暴発寸前の下痢を出し終えて呼吸を落ち着けて、やっと見えてくるもの。大きく開いた膝の間で伸びているショーツの汚点。

細かい未消化物の混じった茶色い染みが、ショーツの生地を広がっていた。

サイアク……高校生にもなつて、ウンチもらすなつて、つ。それも先生と一緒にデートしてるときになつて、もお……っ！

それに下痢が出る寸前で、ハンドバッグと先生に買ってもらった下着の紙袋も床に投げちゃつた。倒れて中身が落ちてないからいいけど、

先生に悪いことしちゃつた。

ギューッギョルルルル！

ブスっ ぶすブチュぶすっ

ずきずきしていたお腹が一気に絞られ、空気を伴ってウンチが降りてきた。うう、水っぽい出る……！！

「んっ！ ふ、っ。ん、うーん……」

ブチッ ブチチチチ ピチピチ ピチチャッ

お腹がギリギリ痛いけど、出てくるウンチは少なめ。だけど肛門はめくれるほど開いてて腹圧も勝手にかかるほど便意が強い。だから空気を引き裂くような濁った音でウンチが飛び出てくる。

こんなの下痢してるってバレバレじゃんっ。

何かに中つたかひどく体調が悪化して下したときのお腹具合だ。お腹は痛み続けるし便意は治まらないし、ゆっくり出したくても勝手にお腹が縮まって下痢便が勢いよく飛び散っちゃう。

「おなかいたい、う、まだでる」

ビジッ ビジジッ ビチビチビチ……ブポッ！

「うーん、うーん」

ブチュチュ ジュオオッ ブジュ〜ッ

早くトイレを出て先生と合流しないといけないのに、なかなかお腹がスッキリしない。腹痛と半端な便意が続いて便座からお尻が離せないから、息んでウンチを出し尽くすまでトイレを脱出することはできなさそう。

遅いのを心配した先生が様子を見に来ないといいけど……。「うううっ！」

プビュ〜ッ！ プチュプチュプチュプチャッ！

ビュ〜ッ！ プッ プ〜ッ！！

もうほとんど水だ……。

でも、だいぶ楽になったかも。お腹の痛みはまだあるけれど、ひどかった便意はほとんど治まった。多分ひどい下痢で腹痛が残ってるだけだろうし、もう出られるかな。

「うん、ッ」

ふほ ぶちゅ、っ ぼちゃん

しゃあああつしゅおおおお〜っじよぼじよぼ

最後にもうひと踏ん張りして一滴ほどの水ウンチを落とすと、ようやくウンチが出終わったのかおしっこも出てきた。

やっと便意が無視できるほどになり、トイレットペーパーに手を伸ばす。たつぷりと紙を巻き取り、お尻を拭く前に壁面パネルにあるおしりのアイコンのボタンを押す。

勢いのすごい下痢だったから、温水で洗い落とさないと。寮のトイレは温水機能どころか暖房便座でもないただの便座だから、学校やお店のトイレでお尻洗えるとすごく安心する。

「ふうっ」

やわらかい温水が腫れたお尻を揉みほぐし、洗い流す。疲労して敏感になった肛門にあったかいお水が当たるの、気持ちいい……。

たつぷりと洗ってから紙で水気を吸い取りつつ、そつとあてがって残った茶色を拭き取る。もう一度紙を取っておしっこ、お尻に広がっていきそうな飛沫もしっかり念入りに拭いた。

お尻をできるだけキレイにしておかないと、先生に買ってもらった

ショーツを汚しちゃうから。

嘘がバレたら恥ずかしいから本当に着替えるつもりだったけれど、ウンチをもらした後に身につけるの、ヤだな。

下痢をして、洗ったお腹と戦って、着替えて。かなりの時間を要して私はトイレを後にした。

「先生おまたせ。いやあトイレ混んでて着替えるの遅くなっちゃった」

もちろん嘘で、先生がトイレの様子を見ていたら即座にバレるけど。「やっぱり試着室借りればよかったのに」

うん、気づかれてないかな？

でも真に気づかれたくないのは下痢をしたことなんかより、後ろ手に隠してる紙袋の中身。トイレットペーパーで何重にもくるんだ、ウンチをもらしたショーツ。

寮に帰ったら夜中にこっそり洗わないと……。

「じゃあ次は先生のアクセ買わないとね。行こ☆」

「はいはいお手柔らかにね」

幸いにも再びお腹が痛くなることはなく、私はスッキリした状態で先生とのデートを楽しむことができた。

何十分もかけて選び抜いたネクタイピン、着けてくれるといいな。